

第137回

最小侵襲手術の実現で患者負担軽減①

技術・体力・チームワークがもたらす
患者本位の究極の人工股関節全置換術

世田谷人工関節・脊椎クリニック 院長 塗山 正宏
(文責・遠藤 隆)



驚異のスピードを支える体力

二〇一七年七月、弱冠三八歳で《世田谷人工関節・脊椎クリニック》(世田谷区南鳥山)を開業した塗山正宏医師の実施する人工股関節全置換術は「究極の最小侵襲手術(MISS)」と、業界内で高い評価を得ている。

開業から一年強だが、同クリニックの公式サイトには、毎週のように手術見学に訪れる同業者の情報がアップされる。前回も述べたように、それは塗山医師が三〇代前半で人工股関節全置換術ラーニングセンター・講師の認定を受けているからだ。

塗山医師が主に実践する仰臥位前方進入法(DAA)および仰臥位前外側進入法(ALS)には、およそ次のような利点がある。

「人工股関節(インプラント)の設置がより正確にできる／手術の際の患者の姿勢の安定保持に優れている／脚長差の確認が容易にできる／両側股関節の同時手術も実施しやすい／切開面を最小限に止められる(塗山医師の場合は約八センチ)／筋肉や腱の切離を伴わない／術後の痛みが少なく、早期回復が可能」

さらに、手術に要する時間が約三分と通常のケースの三分の一以内ですませる塗山医師の水際立った手術手技が加わることにより、「究極

の最小侵襲手術(MISS)」としての評価がなされている。そうした自らの手術の水準を維持・進化させるため、塗山医師が実践している術前・術後の綿密なイメージトレーニングについては前回ご紹介した。

塗山医師がもう一つ、手術の水準を維持・進化させるために重要視しているのが、体力の維持・向上だ。「まだ年齢的な体力の衰えはありませんが、人工股関節全置換術は施術側にかかなりの筋力を必要とするため、それを維持するための筋トレは、日常的に行うようにしています。」

整形外科のなかでも人工股関節全置換術の場合、押す力も引っぱる力も両方必要になってきます。そのため勤務医の頃はよくジムにも通いました。開業後はどうしても時間が限られてきます。そこで院内にダンベル、バーベルを持ち込んでいるほか、診察室に設置してある全身筋トレ用のインクラインベンチを使ったりして、ちょっとした時間の合間に体を動かすようにしています」

ご承知のように、人間の関節部のうち股関節が一番大きい。それをスムーズに人工股関節に置き換えるには、ただでさえ麻酔で動かなくなり、重量感を増している患者の足を持ち上げたり、強く引っぱったりといった力ワザが必要になる。手術手技の

巧みさだけでなく、体力勝負の側面もある。その点、驚くことに「人工股関節の置換のため足をググッと引っぱる際など、通常は両手でやる方がほとんどですが、私は片手だけで強く引っぱれます(笑)」と塗山医師。こうしたちょっとしたパワーの違いの積み重ねも、人工股関節全置換術において驚異の早さを誇る、塗山医師の手術のスピードアップに貢献していることはいうまでもない。

チームワークを支えるスタッフの力

実は塗山医師にとっての筋トレは、前回の最後にふれた「格闘技の選手やプロレスのリングドクターを目指していた、学生時代からの習慣の続き」でもあるのだが、これについてはまた後述したい。

塗山医師の水際立った手術手技を支えるポイントには、手術器具へのこだわりもある。技術に定評ある外科医の例に漏れず、塗山医師の手術器具もほとんどがオーダーメイド。

「たとえば、皮膚を切り傷口を開く際に使う開創器は、少しずつ角度を変えたものなど、すべて自分用のものを作ってもらい、揃えています。

この曲がりの角度をあと約三〇度つけたいとか、この器具の切れ目の部分はもう二・三ミリ広げてほしいとか、実際の手術を通して感じたこと

をすぐ専門業者に伝え、そのつど改良を加えながら現在に至っています。完璧とはいえませんが、だいぶ満足に近い状態に近づいています。手術器具の使いやすさは手術の正確さやスピードなどに直接響いてきますから、とても神経を使います」

そしてもう一つ、スムーズで失敗のない最小侵襲手術の実現に不可欠なのが、スタッフの力量とチームワークだ。手術手技に定評のある外科医が独立し、開業する際には勤務医時代の気心の知れたスタッフが同行するという例は多い。

世田谷人工関節・脊椎クリニックのスタッフもまた、その例に漏れないのかと思ひ質問したところ、「開業に当たって、前の病院からスタッフを引き連れてくるということは、まったく考えなかった」という。

「やはりスタッフもみなプロ意識の高い人が最終的に集まりましたので、その点、不安はありませんでした。むしろなれ合うことを避ける意味でも、心機一転の開業と同時に新しいスタッフとやってみたいという気持ちで強く働いたのかもしれない。」

開業から一年と少しが経過し、手術の症例を重ねていくうちにチームワークも練度を高めてきました。現在はコアのメンバーができましたので、そこに新しい人材を少しずつ入

れては、同等の力量の先発メンバーと交代メンバーを随時入れ替えながら、全体の層を厚くしていけるよう心がけているところです。

とにかく手術はチーム全体が同じ気持ちで臨機応変に動いていかないと上手くいきません。自分だけ十分に準備しても、スタッフの誰かの準備が足りないと、絶対に上手くいかない。バランスが崩れてしまいます。だから誰かが体調が悪くなった場合なども考え、スタッフの層は一定の厚さを確保しておきたいのです」

手術を待つ患者さんへの思い

初顔合わせしたばかりなのに、練達のジャズミュージシャンたちは、簡単な打ち合わせだけでセッションを組み、観客を魅了する演奏をしてのける。世田谷人工関節・脊椎クリニックの手術室には、緊張感のなかにもどこかそんな「ノリ」が基調低音になって流れているのではないか。

その「ノリ」については「スイング感」という表現も出た。たとえばジャズの世界というスイング感は、演者同士の拮抗した力量が共鳴し合い、それぞれのもてる力や技術の粋を、流れるような連携関係のなかで発揮し合う状態などを指す。

緊密なチームワークの支配する手術室でも、そのような流れが生まれ

るものなのだろう。それがまた、塗山医師の手術手技を支えるパワーとなり、より一層の正確さやスピード感を生むのかもしれない。

同時にこのスイング感は、塗山医師が整形外科医を志す要因の一つとなった「リングドクター志望」の源泉、プロレスをはじめとするプロ格闘技の世界とも深い関係がある。

「組み討ちが基本のプロレスも、手足による打撃が基本の立ちワザ系の格闘技も、いちばん盛り上がるのは互いのワザをとことん出し合い、応酬し合った末に凄絶なエンディング、美しいエンディングを迎えるような試合展開です。それを成り立たせるには、厳しいトレーニングを通して人間の体の仕組みを知り、強い部分も弱い部分も知り、その弱い部分をいかに合理的に攻撃、あるいは防衛できるかにかかっています。力の拮抗した選手同士の試合というのは、そうした応酬が最後まで続きます。」

そして私は整形外科医になり、手術をするようになった当初には、しばしば自分で切開した患者さんの体の奥底に向き合う度、あ、人間の体はこうなっていたのか。教科書では知っていたけど、切ってみると印象が違うな(笑)。あるいは格闘技の試合だったら、ここの部分の関節をこういう捻りで攻撃したら、かなり

効きそうだとか(笑)。少し不謹慎な話かもしれませんが、そんなことを思ったりした記憶もあります」

人間の肉体の仕組みに対する、この尽きせぬ興味——。塗山医師の言葉の端々にそれが感じられる。

そうして、これまでに述べてきたような多彩な要素が相まって、塗山医師は今も「手術に対する新鮮な気持ち」を維持し、日夜、精進を重ねている。それだけになお一層、「やがて加齢とともに体力が落ち、視力や思考の速度、手先の感覚などが落ちてきたことなどを自覚したら、その時は速やかに第一線を退こうと考えています」とも語る。同時に「一刻も早く、自分が培ってきた手術技術の技術を後輩に託していきたいという気持ちもある」という。

「それは今現在、自分の手術を待つてくれている患者さんに対し、たとえば自分が事故などで手術をするところが不可能になってしまったような、あまり考えたくはありません(笑)、そんな場合も想定してのことです」

まさに《野球小僧》が野球の真髄を極めたいと心底から願うがごとく、人工関節全置換術に関する自らの技術をとことん追求し、「二四時間、暇さえあれば、よりよい手術の方法を考え」続けて止まない、塗山医師の面目躍如たる言葉といえるだろう。